

マレーシア研究会 夢現

JAMS 会長 立本成文*

マレーシア研究会の発足から 10 年がたつという。点検評価流行りのこのごろの風潮にあわせて反省することも必要であろう。しかしこの 10 年、曲がりなりにも本研究会の代表とか会長とかに祭り上げられていた私が第三者的にコメントする立場でないことは確かである。これからどうするか。いろいろなイメージが錯綜するほうが面白いし、そうあるべきだと思うが、ばらばらで一緒に、一緒に強調するために、とりあえずは、私なりの個人的なイメージを提供したい。

「マレーシア」をネタにしているいろいろな人が集う会である以上、マレーシアという言葉ははっきりとさせなければならぬのかもしれない。しかし多様性を重視するのであれば、マレーシアという言葉が国家のマレーシアに限定してそれに関するトピックだけを扱うというのは避けたほうがよい。みんなが共有できる焦点を定めて、共通の問題意識を鮮明にした、トップダウンの研究会ではないということは大切である。ゆらぎから新しい発想、着想を参加者が得られるような研究会がよい。ディシプリン学会ではなく、サロンのようなアカデミア、本来のシンポジオンを目指すべきであろう。マレーシアという言葉をつま(具)に、私の場合であれば、地域研究を考えてみましょうということである。もっとも、マレーシアのことをより深く理解しようという原点も大切であることはいままでもない。

参加して楽しい会、自分には関係のない発表ばかりであるがそれでも参加しようと思うような会、要するにみんなが話しに加わることのできるサロンにしたいものである。これは幹事や会場当番の担当者、発表者だけが心がければできることではなく、参加者がそのような雰囲気を作り上げる「市民」でなければ到底実現できるものではない。集まって遠慮会釈なくわいわいと言い合う、そこに学の醍醐味を感じる人々が参加する。正統的に学術を語るのではなく、学問を楽しむ場である。もちろん若い人はそこから術を学ぶであろうが、その術は一般の学会などで得られるものとは一味違ったものとなるだろう。あるいは、受け取る側が一味違わせて受け止めなければならないということである。

何のためにそれまでして集うのか。楽しいからである。そして、他の学会やセミナーでは得られない、それぞれのブレイクスルーを求めているからと私は理解している。ブレイクスルーといえば難しく聞こえるが、ひらめきである。エキスパートからヒントを得ることもあるが、むしろ初心の人に学ぶということのほうが大きな糧になると私は思っている。つづめて言えば、他にはないユニークな研究会であり、楽しい学道場だからみんな集まるというのが理想である。

ゆらぐ研究会を存続させるのは、メディアである。特にこのニューズレターが情報交換のメディアであるとともに、サロンを続けていきたいというインセンティブを文字にして残す重要なよすがとなることを祈っている。

* 中部大学国際関係学部長